

8-6-2 温室効果ガス

(1) 予測及び評価

1) 工事の実施

ア. 予測

7) 予測項目等

予測項目	予測の手法及び予測地域等
工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行）による温室効果ガス	<p>予測手法；温室効果ガス排出量を積算する方法により定量的に検討し、温室効果ガス排出量の削減への取り組みを勘案して定性的に予測した。予測対象とした温室効果ガスの対象物質は、工事の実施において建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行により発生する二酸化炭素（CO₂）、メタン（CH₄）、一酸化二窒素（N₂O）の3物質とする。温室効果ガス排出量は、二酸化炭素（CO₂）換算で算出した。</p> <p>予測地域；対象事業実施区域とした。</p> <p>予測時期；工事期間中とした。</p>

4) 予測結果

a) 建設機械の稼働

建設機械の稼働に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-1 に示す。

表 8-6-2-1 (1) 建設機械の稼働に伴う温室効果ガス (CO₂) 排出量：燃料消費

建設機械等		延べ 燃料消費量 (L)	CO ₂ 排出係数 (kgCO ₂ /L)	CO ₂ 排出量 (kgCO ₂)
機械名	燃料			
ブルドーザ	軽油	400,000	2.58	1,032,000
掘削及び積込機	軽油	7,200,000	2.58	18,576,000
運搬機械	軽油	2,800,000	2.58	7,224,000
クレーンその他の荷役機械	軽油	7,300,000	2.58	18,834,000
基礎工事用機械	軽油	73,000	2.58	188,340
せん孔機械及びトンネル工事用機械	軽油	310,000	2.58	799,800
モータグレーダ	軽油	6,400	2.58	16,512
締固め機械	軽油	68,000	2.58	175,440
コンクリート機械	軽油	410,000	2.58	1,057,800
舗装機械	軽油	55,000	2.58	141,900
合計 (CO ₂ 総排出量) (tCO ₂)				48,046

注1. 「CO₂排出係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」（平成22年政令第20号）別表第1より算出した。

表 8-6-2-1(2) 建設機械の稼働に伴う温室効果ガス(N₂O)排出量(CO₂換算)：燃料消費

建設機械等		延べ 燃料消費量 (L)	N ₂ O 排出係数 (kgN ₂ O/L)	地球 温暖化 係数	CO ₂ 換算 排出量 (kgCO ₂)
機械名	燃料				
ブルドーザ	軽油	400,000	0.000064	310	7,936
掘削及び積込機	軽油	7,200,000	0.000064	310	142,848
運搬機械	軽油	2,800,000	0.000064	310	55,552
クレーンその他の荷役機械	軽油	7,300,000	0.000064	310	144,832
基礎工事用機械	軽油	73,000	0.000064	310	1,448
せん孔機械及びトンネル工事用機械	軽油	310,000	0.000064	310	6,150
モータグレーダ	軽油	6,400	0.000064	310	127
締固め機械	軽油	68,000	0.000064	310	1,349
コンクリート機械	軽油	410,000	0.000064	310	8,134
舗装機械	軽油	55,000	0.000064	310	1,091
合計 (CO ₂ 総排出量) (tCO ₂)					369

注1. 「N₂O排出係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」(平成22年政令第20号)別表第5より算出した。

注2. 「地球温暖化係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」(平成22年政令第20号)に示された値を用いた。

表 8-6-2-1(3) 建設機械の稼働に伴う温室効果ガス(CO₂)排出量：電力消費

	延べ電力消費量 (kWh)	CO ₂ 排出係数 (kgCO ₂ /kWh)	CO ₂ 排出量 (kgCO ₂)
切土工等又は既存の工作物の除去	120,000,000	0.464	55,680,000
トンネルの工事	260,000,000	0.464	120,640,000
合計 (CO ₂ 総排出量) (tCO ₂)	176,320		

注1. 「CO₂排出係数」は、電気使用者別CO₂排出係数(2011年度実績)の東京電力株式会社の値を用いた。

b) 資材及び機械の運搬に用いる車両の運行

資材及び機械の運搬に用いる車両の運行に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-2 に示す。

表 8-6-2-2(1) 建設資材等の運搬に伴う温室効果ガス(CO₂)排出量

車種分類等		車種別燃料 種別走行量 (km/台)	延べ車両台数 (台)	車種別燃費 (km/L)	燃料使用量 (L)	CO ₂ 排出係数 (kg CO ₂ /L)	CO ₂ 排出量 (kgCO ₂)
大型車	軽油	100	2,700,000	3.09	87,378,641	2.58	225,436,894
合計 (CO ₂ 総排出量) (tCO ₂)							225,437

注 1. 車種別燃費は、「貨物輸送業者に行わせる貨物の輸送に係るエネルギーの使用量の算定」(平成 18 年 経済産業省告示第 66 号)に示された 8,000kg 以上 10,000kg 未満の値を大型貨物として用いた。

表 8-6-2-2(2) 建設資材等の運搬に伴う温室効果ガス(CH₄)排出量 (CO₂換算)

車種分類等		車種別燃料 種別走行量 (km/台)	延べ車両台数 (台)	CH ₄ 排出係数 (kgCH ₄ /km)	CH ₄ 排出量 (kgCH ₄)	地球温暖化 係数	CO ₂ 換算排出量 (kgCO ₂)
大型車	軽油	100	2,700,000	0.000015	4,050	21	85,050
合計 (CO ₂ 総排出量) (tCO ₂)							85

注 1. 「CH₄ 排出係数」及び「地球温暖化係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」(平成 22 年政令第 20 号)に示された値を用いた。

表 8-6-2-2(3) 建設資材等の運搬に伴う温室効果ガス(N₂O)排出量 (CO₂換算)

車種分類等		車種別燃料 種別走行量 (km/台)	延べ車両台数 (台)	N ₂ O 排出係数 (kgN ₂ O/km)	N ₂ O 排出量 (kgN ₂ O)	地球温暖化 係数	CO ₂ 換算排出量 (kgCO ₂)
大型車	軽油	100	2,700,000	0.000014	3,780	310	1,171,800
合計 (CO ₂ 総排出量) (tCO ₂)							1,172

c) 工事の実施による温室効果ガス

工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行）による温室効果ガス排出量を表 8-6-2-3 に示す。また、この数量は関係法令により定められている排出係数等から算出したものであることから、適切な環境保全措置を実施することにより更なる低減が図られると予測する。

表 8-6-2-3 工事の実施による温室効果ガス（CO₂換算）排出量

区分		温室効果ガス（CO ₂ 換算）排出量（tCO ₂ ）	
		小計	行為別合計
建設機械の稼働	燃料消費（CO ₂ ）	48,000	228,370
	燃料消費（N ₂ O）	370	
	電力消費（CO ₂ ）	180,000	
建設資材等の運搬	CO ₂	230,000	231,285
	CH ₄	85	
	N ₂ O	1,200	
合計（CO ₂ 換算総排出量）（tCO ₂ ）			459,655
年間 CO ₂ 排出量（平均）（tCO ₂ /年）			32,833

注 1. 工事期間は 14 年とし、1 年間あたり温室ガス排出量（平均）を算定した。

イ. 環境保全措置

本事業では、計画の立案の段階において、温室効果ガスに係る環境影響を回避又は低減するため、「高効率の建設機械の選定」、「高負荷運転の抑制」及び「低燃費車種の選定、積載の効率化、運搬計画の合理化による運搬距離の最適化」について検討した。さらに、事業者の実行可能な範囲内で、工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行）による温室効果ガスに係る環境影響を回避又は低減することを目的として、表 8-6-2-4 に示す環境保全措置を実施する。

表 8-6-2-4 環境保全措置

環境保全措置	実施の適否	適否の理由
高効率の建設機械の選定	適	高効率の建設機械の採用により、排出される温室効果ガスの低減が見込まれるため、環境保全措置として採用する。
高負荷運転の抑制	適	建設機械の高負荷運転を抑制することにより、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
工事規模に合わせた建設機械の選定	適	適切な機械の選定により必要以上の建設機械の配置及び稼働を避けることで、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
建設機械の点検・整備による性能維持	適	適切な点検・整備により建設機械の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
資材及び機械の運搬に用いる車両の点検・整備による性能維持	適	適切な点検・整備により資材及び機械の運搬に用いる車両の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
低燃費車種の選定、積載の効率化、運搬計画の合理化による運搬距離の最適化	適	低燃費車種の選定、積載の効率化、合理的な運搬計画の策定による運搬距離の最適化等により、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。

ウ. 評価

7) 評価の手法

評価手法	・回避又は低減に係る評価 事業者により実行可能な範囲内で回避又は低減されているか検討を行った。
------	--

4) 評価結果

工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行）に伴い発生する温室効果ガス排出量は、表 8-6-2-3 に示すとおりであり、本事業における温室効果ガス年平均排出量は、東京都における1年間あたりの温室効果ガス 57,250 千 tCO₂¹と比較すると 0.06%程度である。

また本事業では、工事の実施（建設機械の稼働、資材及び機械の運搬に用いる車両の運行）に伴う温室効果ガスの排出による環境負荷を低減させるため、表 8-6-2-4 に示した環境保全措置を実施することから、事業者により実行可能な範囲内で低減が図られていると評価する。

¹ 出典：都における温室効果ガス排出量総合調査（2010（平成22）年度実績）（平成25年3月、東京都環境局）

2) 鉄道施設（駅、換気施設）の供用

ア. 予測

7) 予測項目等

予測項目	予測の手法及び予測地域等
鉄道施設（駅、換気施設）の供用に伴う温室効果ガス排出量	<p>予測手法；温室効果ガス排出量を積算する方法により定量的に検討し、温室効果ガス排出量の削減への取り組みを勘案して定性的に予測した。予測対象とした温室効果ガスの対象物質は、鉄道施設（駅、換気施設）の供用により発生する二酸化炭素（CO₂）とした。</p> <p>予測地域；対象事業実施区域の内、温室効果ガスの排出が認められる鉄道施設（駅、換気施設）とした。</p> <p>予測時期；鉄道施設（駅、換気施設）の供用が定常状態となる時期とした。</p>

1) 予測結果

a) 駅施設において使用する設備機器

設備機器の使用に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-5 に示す。

表 8-6-2-5 設備機器の使用に伴う温室効果ガス (CO₂) 排出量 (地下駅)

エネルギー	単位	エネルギー消費量 (kWh/年) (Nm ³ /年)	CO ₂ 排出係数 (kgCO ₂ /kWh) (kgCO ₂ /Nm ³)	CO ₂ 排出量 (kgCO ₂ /年)
電気	kWh	106,000,000	0.464	49,184,000
都市ガス	Nm ³	4,200,000	2.25	9,450,000
合計 (CO ₂ 総排出量) (tCO ₂ /年)				58,634

注 1. 電気の使用における「CO₂ 排出係数」は、電気利用者別 CO₂ 排出係数（2011 年度実績）の東京電力株式会社の値を用いた。

注 2. 都市ガスの使用における「CO₂ 排出係数」は、「地球温暖化対策の推進に関する法律施行令」（平成 22 年政令第 20 号）別表第 1 及び東京ガス株式会社公表資料より算出したより算出した。

b) 換気施設において使用する設備機器

設備機器の使用に伴う温室効果ガス排出量を表 8-6-2-6 に示す。

表 8-6-2-6 設備機器の使用に伴う温室効果ガス (CO₂) 排出量 (換気施設)

エネルギー	単位	エネルギー消費量 (kWh/年)	CO ₂ 排出係数 (kgCO ₂ /kWh)	CO ₂ 排出量 (kgCO ₂ /年)
電気	kWh	44,500,000	0.464	20,648,000
CO ₂ 総排出量 (tCO ₂ /年)				20,648

c) 鉄道施設（地下駅、換気施設）の供用による温室効果ガス

鉄道施設（駅、換気施設）の供用に伴い発生する温室効果ガスの排出量を表 8-6-2-7 に示す。
また、この数量は関係法令により定められている排出係数等から算出したものであることから、適切な環境保全措置を実施することにより更なる低減が図られると予測する。

表 8-6-2-7 鉄道施設（駅、換気施設）の供用による温室効果ガス（CO₂換算）排出量

区分	温室効果ガス（CO ₂ ）排出量（tCO ₂ /年）
	合計
駅施設において使用する設備機器	59,000
換気施設において使用する設備機器	21,000
年間 CO ₂ 排出量（平均）（tCO ₂ /年）	80,000

イ. 環境保全措置

本事業では、事業者の実行可能な範囲内で、鉄道施設（駅、換気施設）の供用による温室効果ガスに係る環境影響を回避又は低減することを目的として、表 8-6-2-8 に示す環境保全措置を実施する。

表 8-6-2-8 環境保全措置

環境保全措置	実施の適否	適否の理由
省エネルギー型製品の導入	適	省エネルギー型製品の導入により、発生する温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備及び管理	適	温室効果ガスの排出抑制に留意した施設の整備及び管理を行うことにより、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。
設備機器の点検・整備による性能維持	適	適切な点検・整備により設備機器の性能を維持することで、温室効果ガスの排出量を低減できるため、環境保全措置として採用する。

ウ. 評価

7) 評価の手法

評価手法	・回避又は低減に係る評価 事業者により実行可能な範囲内で回避又は低減されているか検討を行った。
------	--

4) 評価結果

鉄道施設（駅、換気施設）の供用に伴い発生する温室効果ガス排出量は、表 8-6-2-7 に示すとおりであり、本事業における温室効果ガス年平均排出量は、東京都における 1 年間あたりの温室効果ガス 57,250 千 tCO₂²と比較すると 0.14%程度である。

また本事業では、鉄道施設（駅、換気施設）の供用に伴う温室効果ガスの排出による環境負荷を低減させるため、表 8-6-2-8 に示した環境保全措置を実施することから、事業者により実行可能な範囲内で低減が図られていると評価する。

² 出典：都における温室効果ガス排出量総合調査（2010（平成 22）年度実績）（平成 25 年 3 月、東京都環境局）